

## 平成 21 年度 岩手県農業研究センター試験研究成果書

区分	指導	題名	平成 21 年産 小麦の生育経過の概要と特徴	
[ 要約 ] 平成21年産小麦の10aあたり収量は227kg/10aと7年ぶりに200kg/10aを超え、収穫量でも18年ぶりに8000t台を達成した。一等比率も89.0%と良好であった。				
キーワード	小麦	作柄		技術部 作物研究室 県北農業研究所 作物研究室 環境部 病理昆虫研究室

### 1 背景とねらい

県内における麦の生育・作柄等に関する調査・情報を取りまとめ、その概要や特徴を整理し、今後の技術対応の資とするため取りまとめる。

### 2 成果の内容

#### (1) 生育経過

播種が適期に行われ、11～12月の気温が高く経過したことから越冬前の生育は平年を上回った。根雪期間は県北部で平年並みだったが、主産地の県中南部では暖冬少雪によりかなり短くなった。一部で縞萎縮病が発生したが、全般に病害虫の発生および被害は少なかった(表3)。出穂・成熟は昨年と同様に気温が高く経過したことから平年に比べ5日程度早まった(表1)。

#### (2) 作柄および収量構成要素

小麦の平均収量は 227kg/10a と、7 年ぶりに 200kg/10a を超え、収穫量でも 18 年ぶりに 8000t 台を超えた。この要因として、播種が適期に実施され、また寒雪害が少なく茎数が多い状態が続き、最終的な穂数が多めに確保されたこと  
出穂から収穫まで平年に比べ日照が多く(表2)、適度な降水もあり登熟が順調に行われたこと、また収穫が県北部や播種の遅れた一部地域を除き、本格的な降雨が続く前に概ね終了したこと  
「ナンブコムギ」に代わり、収量性の高い「ゆきちから」の作付面積が増えたこと(推定; H19: 256ha→H20: 589ha H21: 882ha)などが挙げられる。

#### (3) 品質

一等比率については過去 10 年間で最も高い 89.0%となった。

### 3 成果活用上の留意事項

全県での活用を対象としているが、気象および生育経過等は作況試験を実施している北上・軽米の調査結果を基に作成している。よって一部地域や特定の品種では適合しない場合がある。

### 4 成果の活用方法等

#### (1) 適用地帯又は対象者等

県下全域の麦栽培技術指導者、関係機関

#### (2) 期待する活用効果

現地指導における資料作成の資として活用

### 5 当該事項に係る試験研究課題

(890) 畑作物の生育相及び気象反応の解明 [ H14～H22、県単研究 ]

### 6 研究担当者

伊藤信二、小綿寿志、荻内謙吾

### 7 参考資料・文献

麦類・大豆作況試験報告、病害虫防除実績検討会資料、農作物統計他

## 8 試験成績の概要(具体的なデータ)

### 平成21年産 小麦生育経過概要図

